知り、若年寄に引立て、段々栄進して老中となられましたが、幾多の難問題を処理し、幕末に大きな功績を残されました。

小笠原長生公

長生公は　壱岐守の御子で、日清、日露の戦いに出られ、元海軍中将子爵、現在九十才の高齢を以つて、静岡県伊豆長岡に余生を保つておられます。　文才に秀で「東郷元帥傳」三巻の外沢山の著書があります。　以前小学校の読本にあつた「水兵の母」は長生公のお書きになつたもので、又金波楼の名で、清元や浮瑠璃も書いておられます。　今の陛下が東宮だつた時、東宮御学問所が出来て、東郷元帥が総裁で、長生公は幹事を務めておられました。

裏町カンネ

旧幕時代　大石町と十人町の中間辺に、勘右衛門と云う　頓智のすぐれた、コスつからい、それでいて何処か、愛嬌のある奇人がいて、その奇言奇行が「裏町カンネ話」として沢山伝えられています。　現在五十才位の人々は、子供の頃寝物語りに「カンネ話」を聞かされて来たものです。

一例をあげると

〃ある日のこと、若い者が四五人で、泥鰌汁をはじめようとしている処に、その匂を嗅ぎつけた様に、ひよつこり　カンネがあらわれた。　タダで食われることを警戒した若者の一人が、敬遠しながら、「お前も、豆腐ドンもつてきてカタルゝ加わる〕ならヨカがなあ。」というと、カンネは「カタつてんヨカバツテン、俺や　一寸行かんならんトコンあるケンなあ……」と渋る。　ツボにはまつたとよろこんだ若者　「そんなら早うイタチ来にやいかんタイ。」

雑談しているうちに、カンネは出て行つた。　皆が厄介払いが出来たとよろこんでいると、間もなくカンネが　「俺もカタル。」と鍋に豆腐を入れて帰つてきた。　珍しいこともあるものの、でも豆腐を持つて来たのだから仕方がない。

「コケ、いらんかい。」　蓋をあけて　カンネを仲間に入れる。

鍋の湯が煮えはじめた時、味噌が入れられる。　ゴボウが入れられる。　つゞいて、キユウキユウ音をたて、泡を吹いて泥鰌が入れられる……。　その瞬間、カンネは　大事そうに抱えていた鍋の豆腐を、丸ごとドブンと、いま泥鰌の入れられた鍋の中に入れる。

「アラ、切らジや？」　と一同眼を丸くすると、カンネは

「インニヤ、丸ごと煮て、ソリバつゝいて食べた方がウマカ。」　とすましている。

いつも変つた事ばかりする奴だ、それも一興だろうと、煮えて味のつくのを待つていると、表にあわたゞしく足音がして、カンネの仲間がのぞいて、

「カンネ、まだ行かんとカイ。　ドケエ（何処へ）行だろかて、探し廻つたバイ。」

と云う。　カンネは　あわてゝ、「スマン、スマン！」と答え、皆に、

「一呼び来たケン、行かんならん。　俺や、　もうカタランバイ。」　といつて、　鍋の中から、そつとくずれぬように、自分のいれた丸ゴトの豆腐を取り出して、　自分の鍋に移すと

「じゃ、又な」　と云い残して帰つてしまつた。

なかしな奴だと思いながら、そろゝく煮え立つてきたので、

「じゃ、始ミユウ。」「豆腐は切つて入れさしやよかつたなあ」

とアタをあけて椀につぐと、中はゴボウばかりで、かんじんの泥鰌は一匹もいない。